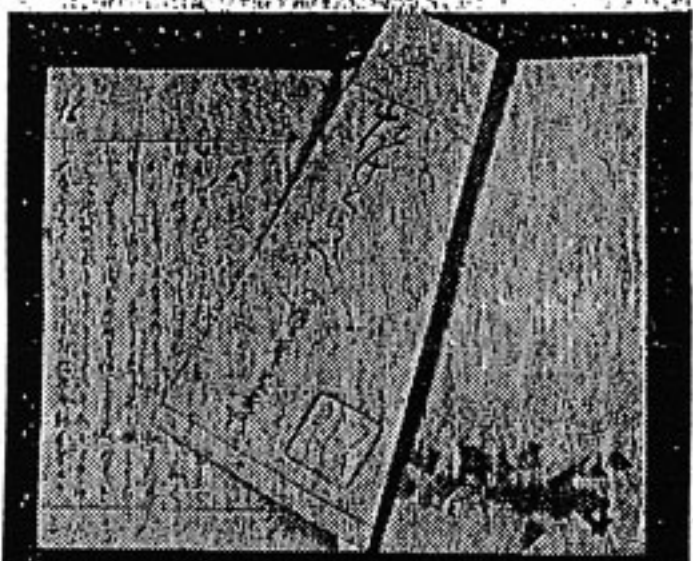


たけくらべの遺稿発見



穂葉一葉

明治文学の最大傑作に数えられる『たけくらべ』の原稿は、早く行方不明になり、失われたと信じられていたが、生誕八十五年を記念して浅草松屋で開かれている毎日新聞社主催の「一葉展」が契機となり、一美術商の手元に発見されていることがわかった。遺稿はきょう十六日から陳列するが、貴重な文化財として一葉研究者を喜ばせている。再発見された遺稿は「たけくらべ」の完本で四百字詰め七十五枚。最後の余白には明治の文学者斎藤緑雨の筆跡もみられ、一葉研究で芸術院賞を受けた作家和田芳恵氏の鑑定で真贋と断定された。



①発見された「たけくらべ」の遺稿
②その最後の余白にある緑雨の筆跡

愛蔵者は松屋浅草支店美術部部長の南山忠四郎氏で、同氏や和田氏の協力により、遺稿は明治二十九年「文芸倶楽部」四月号第五回に、まとめて掲載された時のものだという。

「一葉展」がきっかけ

一美術商の手元に秘蔵

きょうから一般に公開

大橋利雄氏だった。現存する「一葉の手紙」からみて、当時「たけくらべ」の好評を記念して出版する遺稿がなくて、「一葉が大橋氏から「十円」を借金した

家の中では、先食失われたといわれていた。利田氏が増田豊氏とともに「一葉集」を編むための遺稿を盗み取ったが、ついに発見できなかったという。実は佐太郎氏の手元にあったわけだが、最後の首しまがらうを手放すことになった。た

重要文化財に指定の価値

和民の区に集められた。自ら通じているが、筆跡からいって使っている紙の類中島の紙質が、きょうも真贋にまちがいはない。完全な形で残っているのはこれと自明だ。重要文化財に指定されてもいいものだ。もうなぐさと思っていただけに、この再発見はすばらしい。研究上にも大きな立派と思つ。

当時の所蔵者は「文芸倶楽部」の出版元「博文館」の編集長故大橋氏の没後、長男佐太郎氏にゆずられ、門外不出として商家にしまわれていた。戦争の烽火がやぶるやうに遺稿は増田利雄などの輪とともに新聞に陳列させたが、佐太郎氏の遺所がわからないことから、戦災で焼けたとか大学生の手に渡ったとかデマが乱れとび、一葉研究

さい、その狙撃という形で大橋氏にゆずられたといわれている。手ざんを知っており、「こんな大切なものを」と借金までして当時としては相当高価な値で買いつけたという。昭和二十四、五年ごろのことだといふ。その後、南山さんがもっていることを知った美術商が「売ってくれ」と何度もいってきたり、最近ではボクストン美術館に郵から二万円でバイヤーまで中

し込んできたという。しかし南山さんは手放す気になれず、金庫に秘蔵していた。こんど毎日新聞社が「一葉展」を企画する知り、発見して欲しいという意味がないと田嶋することになったわけである。十五日、会場を島にきた「一葉」のサイン欄に、増田夫人も、まがしまわって、たけくらべの遺稿。心から喜んだ。

からいって、戦災で焼けたとか大学生の手に渡ったとかデマが乱れとび、一葉研究から二万円でバイヤーまで中

みせるつもりです。